様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１４日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２０１０　～　２０１２
課題番号：２２７３０７１２
研究課題名（和文）発達障害児のキャリア教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of career educational program for children with developmental disability

研究代表者
新井　英靖　　（Hideyasu Arai）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０３３２５４７

研究成果の概要（和文）：
本研究は発達障害児のキャリアを形成の過程について明らかにした。そこでは，認知的に社会のルールを理解させるソーシャル・スキルトレーニングが必要であるばかりでなく，社会的・感情的な側面の成長が欠かせないことが明らかになった。そうしたキャリアを形成するためには，他者と交流し，協働的な活動を通して教育することが重要であることが本研究から明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study investigated how to develop career development for children with developmental disability. It is essential for career development for children with developmental disability not only to train social skills but also to develop social and emotional aspects.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：教育
科研費の分科・細目：特別支援教育
キーワード：発達障害　キャリア教育　感情　協働学習

１．研究開始当初の背景

21世紀に入り，通常学級に在籍する発達障害児の校内支援体制が整備されてきた。2007年には学校教育法の一部が改正され，特別支援教育が制度的に位置づけられ，2009年3月には特別支援学校の新学習指導要領が出され，特別試験教育の研究は教育実践の質を高めていくことに焦点化されてきている。こうした中で，科学研究費補助金を受けて「発達障害児の学習支援システムと教材開発に関する実践研究」（研究代表者：新井英靖；平成19年度～平成21年度）を実施し，通常の学校における発達障害児支援を実践的に研究してきた（その研究成果の一部を『気になる子どもの教育相談ケースファイル』（ミネルヴァ書房）として出版し

た）。

しかし，上記の研究を進める中で，高等学校等に在籍する*青年期の発達障害者には，学習支援システムや教材開発といった教科学習上の配慮・支援だけでは不十分であり，就労や卒業後の生活を見据えたキャリア教育を体系的に実践することが必要であることが課題として浮上*した。特に，小・中学校において不登校となっていたり，いじめられた経験があるなど，自己肯定感や成功経験が乏しい中で成長した発達障害者は，情緒不安定などの二次的障害を抱えていることが多い。認識能力の高い発達障害者は企業就労を実現しても，情緒不安定等の二次的障害のために職場で，人間関係をうまく形成することができずに，早期に離職しているケースも多いことがさまざまなところで指摘されてきた。そのため，発達障害児への教育では，情緒的な安定を図り，社会や人とのつながりをもつスキルを身につけさせ，自ら職業を選択できるように支援するキャリア教育を提供することが必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究では発達障害児に対するキャリア教育プログラムを開発するために，

⑴ 発達障害児の社会・情緒的発達を促す教育プログラムの内容および方法の体系化

⑵ 発達障害児が自らの職業適性を知り，学校から就労先への移行する際に必要なキャリア形成支援プログラムの開発

を行うことを研究の目的とした。

３．研究の方法

本研究は，目的を達成するために，以下の２点について研究を行った。

⑴ 英国のPSHEの内容と方法を明らかにしながら，発達障害児のキャリア形成と社会的・感情的側面の成長との関連性について検討する

⑵ 発達障害児に対するキャリア教育の実践を調査・分析し，内容と方法を体系的にまとめて公表する。

４．研究成果

本研究では，子どもの感情コントロール力を育てるには，他者と協働しながら実感を伴った社会的活動を展開することが必要であるということが明らかになった。そして，この活動の中で身につけた力が企業で働いたり，あるいは作業所や施設で過ごしたりする時の重要な基盤となることを指摘した。

とかく，青年期の子どもには，社会のルールを守らせようと大人主導の教育・指導が展開されやすい。しかし，社会のルールを守れる子どもに育てるためには，「ルールがわかる」というだけでなく，自尊心や自己肯定感といった感情・情緒の発達が必要であると指摘してきた。

そして，こうした発達を遂げるためには，「子どものやりたいこと（関心や価値）」と「社会的な役割・期待（社会からの要請）」を統一できるように，さまざまな協働活動に参加することが必要であるということが明らかになった。こうした活動に参加できる大人に育てるということは，まさにキャリア教育のねらいの一つであり，「アイデンティティ」を確立などと呼ばれる青年期の重要な発達課題を乗り越えることであると考える。

わかりやすく言えば，アイデンティティの確立とは，子どもが心の中に生きていくための指針をもつようなものである。すなわち，「自分はこんなふうに生きていけば良いんだ」と考えることができ，そうした自分を受け入れられるように成長することである。こうした成長を遂げていれば，社会に出てから多少の困難場面に直面しても，「何とかなるはず」と思いながら，その状況の中で可能な限り自己実現をはかり，また，自分の役割を果たそうとするのではないかと考える。

このように考えると，これからの教育は子どもの感情や価値を含めて授業を展開する

ことが重要となる。

これまでの学校教育では，子どもが社会人として自立していくためには，知識や技能をたくさんもっていて，それをすばやく，正確に引き出せることが重要であり，そのため認識能力を成長させることに主眼が置かれてきた。しかし，これからの教育実践は，「一人でわかる・できる力」を追究する 20 世紀型の実践から抜け出さなければならないと考える。

すなわち，困難場面に直面しても，自分を見失わず，状況の変化に対応できる力を育てていくことが, 21 世紀の新しい教育の目的であると考える。この目的を達成するためには, 本書で実践的に示してきたように，子どもが試行錯誤しながら考え，他者と協力しながら課題を解決していく力を育てる授業づくりが求められるだろう。

もちろん，こうした新しい教育実践を開発する必要があるのは，特別支援教育に限ったことではない。むしろ，民間企業に勤めることを希望する障害のない青年のほうが顕著に要求される学力であるかもしれない。しかし，障害特性に応じて認知的な支援が広く普及している現状をみると，特別支援教育においても，あえて「状況の変化に対応できる力」を育てることが重要であると筆者は考えている。

なぜなら，「状況の変化に対応できる力」があれば，困難場面に直面したときに，即座にパニックを起こすのではなく，「どうしようか」と考え，落ち着いて行動することができるようになるからである。そして，幼少期からさまざまな状況の中で試行錯誤し，自分なりの判断や解決方法を他者とともに考える経験をしている子どもほど，心理的な支えがしっかりと内面化されていて，多少の困難では揺らぐことのない子どもに成長していくからである。

このとき，障害により生じる困難を認識面から支援することを否定しているわけではないということを付け加えておきたい。むしろ，子どもの認識面の成長を確固たるものとするためにも，認識面を成長させる学習だけでなく，友達から学び，友達に教えるというような協働的な学習を特別支援教育の教育実践にしっかりと位置づけることが重要であるということを強調したいのである。

こうした実践を展開するためには，友達から学び，友達に教えるといった協働的な学習をすることが大切である。

学校の学習場面であれば，リーダーが固定され，その子どもに周りの子どもがついていくという構図ではなく，わからない子どもにはわかる子が教え，教わっている子どももどこかで活躍できるというように，集団全体が高まっていくことが重要である。

これは，チームで協力体制を築いているほうがすべての子どもの学習効果は高いという意味でもある。すなわち，日常的にメンバーの特技（強み）を活かして活動できる集団は大きな成果を上げやすいし，その逆に，不測の事態が生じたときに，メンバーどうしで苦手なところを補いあうことができる集団は，さまざまな困難を乗り越えられるということである。

こうした学習集団を形成するためには，一生懸命やった上で間違えたり，失敗したりすることは何も恥じることではないということを普段からクラス全体に伝えていることが重要である。そして，「困ったときはお互い様」という考え方で，気がついた人が助けに入ることを賞賛することを日頃から教師が実践していることが重要である。

以上のような協働的な学習を実現するには，授業の内容がさまざまな子どもの課題や

特技を包括するものでなければならないし，教師は学習内容と子どもの能力差を埋めるためのさまざまな配慮や工夫をしていかなければならない。

このとき，教師は「教える人」として子どもの前に立つのではなく，「みんなで考えていく」という姿勢を示すことが重要である，しかし，それは教師の指導性を放棄するという意味ではなく，子どもと協働的に活動する裏で，教師はしっかりとした意図をもって指導する必要があると考える。

たとえば，作業の途中でやり方がわからなくて困っている子どもがいたときに，「次はこれでしょう」と教えてしまうのではなく，「どうしたらよいか，自分たちで考えてごらん」と問いかけるようにするなど，教師はあたかも子どもが自分たちで問題を解決しているかのように導いていくことが大切なのである。時には，「誰か教えてあげられる人はいる？」というように，集団全体に問題を広げ，意識的に友達どうしを関わらせるなども，教師の意図（指導性）の一つであると考える。

このとき，教えに入った子どもも，いざ教えるとなるとわからなくなってしまい，また別の子どもが教えに入るということがあるかもしれない。そうした状況になった時には，教師はむしろ指導のチャンスと捉え，小集団で話し合いながら，疑問を解決できるまで，いろいろと試しにやらせてみること（試行錯誤）が必要な場合もあるだろう。

もちろん，このような授業展開は，ともすれば，膨大な時間を必要とするものである。そのため，すべての疑問に対して集団全体で考え，答えがわかるまでみんなで話し合うということは難しいかもしれない。だからこそ，教師は子どもたちの疑問に高いアンテナをはっておき，「この疑問はみんなで考えさせよう！」と思ったときを逃さず，集団に問いかけることが求められる。

このように，一人の疑問をみんなの問題として捉え，集団で解決していく中で「状況の変化に対応できる力」は育つのである。感情コントロール力とキャリアを育てる授業では，多少のまわり道をしながらも，時間をかけてみんなで「考え」，それぞれの子どもが「納得する」プロセスを大切にすることが重要なのだということが本研究から明らかになった。

そして，以上のような感情コントロール力とキャリアを育てる授業を展開するためには，教師自身にもキャリア（専門性）が求められる。

このとき，授業づくりに熱心に取り組むキャリアを積んだ多くの教師が，授業改善を通して「子どもたちの見方が変わった」と語っていることは傾聴に値する。つまり，授業を通して子どもと向き合う多くの教師は，うまく授業を展開できないときにも，何とかしようと必死になって授業をした後，自分の実践を振り返えると，自分自身が変化していることに気がつくのである。

こうした自己変革を前提とした振り返り（リフレクション）をすることで，教師は小さな成長を積み重ね，そうした中で心底から子どものことを「わかった！」と実感するのだと考える。学術的には，こうした教師を「反省的実践家」などと呼び，新しい時代の教師像と考えられている。筆者も今後の教員養成（特に現職教育）では，こうした資質や能力を育てるために，教師は事例検討や研究授業を通して振り返り，自己の教授方法を改善する研修を重ねることが重要であると考えている。

そもそも，私たちの生活は予測不能な流動的なことばかりである。明日の授業が予定通

り進行するかは誰もわからない。子どもは教材にまったく興味を示さないかもしれないし，教師の意図と異なる方向に授業が進行していくかもしれない。そうした不測の事態に遭遇すれば，たとえ教師であっても自らの感情を動揺させることもあるだろう。教育とはそうした営みだからこそ，教師もキャリア形成の視点をもって，継続的に自己研さんする努力と計画が必要なのだと考える。

そして，教師にもキャリア形成の視点が必要であるというならば，授業づくりは，子どもや同僚教師とともに行う協働活動であると考えることが大切であろう。

特に，感情コントロール力とキャリアを形成する授業づくりでは，子どもの揺れ動く気持ち（感情）に対して，同僚教師と連携しながら「しなやかに」応答し，子どもの中に核となる考えを創出することが求められる。このため，教師自身も変化する状況に応じて揺れ動く自分をモニターしながら，子どもが示すささいな変化に対して，複数の解決ルートの中から最善の方法で瞬時に応答できるようになることが教師に求められる。

こうした特別支援教育担当教師の専門性は，子どもや同僚教師と授業を創造する中で身につくものであり，日々の授業の中で試行錯誤と課題解決を繰り返し，内省しながら実践を修正する中で形成されるものであると考える。こうした教師の成長を「教職キャリア」と呼ぶならば，特別支援教育の教職キャリアは，同僚教師とともに日々の実践を内省する中で，地道に授業改善を積み重ねていくことでしか形成できないということが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）

新井英靖・三村和子・茨城大学教育学部附属特別支援学校（編）『発達障害児の感情コントロール力を育てる授業づくりとキャリア教育』(黎明書房).2011 年.7-20 頁.21-32 頁.47-60 頁.61-74 頁.131-148 頁.149-160 頁.

６．研究組織
(1)研究代表者：
新井　英靖（HIDEYASU ARAI）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：30332547